

北溟雜誌 と 本莊了寛

(平成十二年十一月五日)  
(於 新宿文化センター)



佐渡金井町出身の「本莊了寛」という人物の名は余り知られておりませんが、明治時代の日本に幾つかの輝かしい業績を残しました。新潟県では最初の月刊誌『北溟雑誌』を発行したり、日清戦争に出征し異国の地で戦死した佐渡人の功績を顕彰するため「明治紀念堂」を建てた人でもあります。

今日は、この、知る人ぞ知る本莊了寛の人となり、彼がどうしてこういう業績を残すに至ったかについて時代背景などを交えながら少しお話ししてみたいと思います。

越後の人が関東に行って、江戸時代の終り頃から明治にかけて活躍します。その中に群馬県の安中市でお酒（銘柄「榭花」榭花）を造っている小坂橋靖正こさかはしやすまきという人物が、『銘酒榭花記——越後杜氏と碓氷の地酒物語』という本を著していて、その中でこんなことを書いております。

「群馬県の人は俺が見たところ駄目である。ひとが何かをすると直ぐ足を引張る。新潟県（越後）の人とそこが違う。越後は上州と競い合っているが、越後は上州に決して負けることがない」。

どういう風に負けないかと思つて調べてみると、越後人は、自分が雇う人間は皆んな越後から連れて来ている。そうして、

「……みんなやる気で仕事をやるわけけども、どんなに会社がうまくいかなないことがあつても、そういう時には力を合わせる事が出来る。上州の人は会社が順調な時にはいいが、ちつと（少し）具合が悪くなると皆んなやめていってしまう。こういうところが無いのが越後の人の強味である」。

それだけ聞いていると、わあー、越後の人間は凄いなあと思うんですが、よくよく考えてみますと、或る日突然そうになった訳ではないんです。江戸時代の初め時分に、越後の人間がそういうクセがつく理由が

あるんです。

それは佐渡で金銀山が開発されたからです。数万人の人間が相川に住むわけですが、そうするといっぺんに沢山の食物が要ります。米の値段が暴騰して慶長十年（一六〇五）に相川の値段が越後の五倍から七倍になったという記録があるほど。そこで、百姓が田圃を開墾して米を作ったら得だぞ、ということになるわけです。越後の人たちがどうやって荒地を開いて田圃にしたかというところ、そこに越後の人間のやり方に独特なものが見出だせるんです。越後の頸城（高田）平野に保倉川という大きな川が流れていて小さな支流と高低のある野谷地（荒地）がある。こういう所を開墾する時は共同作業をやることになります。佐渡にはこのような大きな川がないのでちょっと分かりづらいんですが、棚田を作るようにして耕していかなければならない。こういう開発方法（「ハエ」）をとらないと田圃は出来ないのです。その場合には個人あるいは一軒の家では到底手に負えませんし、又個人では到底賄えない多額の資金が要りますので、この資金を出す人がいないと開発は出来ません。隣の家をちよつと移したり少し土手を崩したぐらいではとても出来ないわけです。高田藩では大きな商人たちがこの資金を出しました。それから労働力ですが、多くの百姓を遠くから集めてきました。この場合、上州の藤岡や富岡（一ノ宮）からたくさんやってきます。昔、真田幸村という大将が豊臣に味方して負けたので、徳川になってから家来たちが大勢浪人になり、村におりました。そういう浪人たちに、越後へ行くと土地がもらえる、開墾したらその十分の一は貰えるらしいぞ、という噂が聞こえる。それにつられて本人は勿論、家族連れでやって来るようになる。私は、こういうインセンティブを考え出して開発を進めた高田藩というのは大変立派な藩だと思っています。

勿論、藩は年貢を沢山得るために開発を進めたわけですが、一言付け加えておきたいことがあります。例えば、享保の頃吉宗が新田大開発を進めたという風に言いますが、将軍が進めたからといって、それで百姓が動くかといえば古今東西そんなことはないんです。本に、「将軍が進めた」と書くのは構わないけれども、実際はそういうことではなく、高田藩の場合には、耕した田圃の十分の一は呉れるということ

やったから開発が進められたんです。これをやった小栗美作おぐりたまふという家老は、後に越後騒動という内紛のため切腹となり、藩主の松平光長も処分されるのですが、小栗は西回り航路を開いた経済人河村瑞賢に開発事業の知恵を借りたんです。こういうことで、浪人して上州ではそばそと農業をやっていた百姓が土地持ちを夢見て家族共々どつとやって来たんです。

これは面白いことだと思えますが、このような場合、佐渡なんかでも、地元では出て行った連中を「貧乏くじを引いて出ていった」という風に言います。また、北海道へ出ていった場合など、出た方の側はみんな「大志を抱いて出てきた」と言うし、地元側は出ていった人を「駄目になって食っていけんようになって出ていった」という風に言います。こういう言い方は、佐渡は云うに及ばず全国何処でも同じです。国元では、ここに居れないから出ていったという方が言いやすいし、出た当事者からすれば、国元を離れて将来を夢見た、と言います。どちらが本当なのか判じ難いように思われます。

高田藩が、耕したら十分の一呉れるぞと言った時、十分の一を貰いたいと思う力の強さが上州では強かった。つまり、よし、貰えそうな越後で頑張ってみようと考えての心が上州では強かったのです。ですから、後の時代の話ですが、佐渡の場合でも東京へ出て働くというのは、東京に牽引力というものがあったからだと思えます。昭和三十年代に西蒲原郡の中学生の進路について調査したものがあります。佐渡の親の意見を調査すると、大学を出て東京で勤め人になった方がいいと言うのですが、西蒲原では、家で百姓やれば良い、金属工場に行けばいくらでも働き口がある。大学に行く必要はないと考える者が圧倒的です。高校にも行かん者がたくさんあります。佐渡では、高校ぐらい行かなくちゃ駄目だ、他の人に頭が悪く思われる、なんて言います。ですから、同じ人間であっても自分の属する地域によって、さっと他所へ出ていく所とわりかし出ていけない所があります。どっちがいいとかという事はないので、どっちが進んでいるとか遅れているということも言えません。時代が、場所が人を作るといふことです。

さて、高田に集まってきた百姓は、みんなが輪になってみんなで土手や溝を作り、地面を平らにして田

圃を開き、公平に分けていく。ですから共同で何かをする、直接自分の家の利益にならなくてもみんなが力を合わせるということを非常に大事な事として肝に銘じるわけです。ここに踏込んでいったのが浄土真宗の教如（東本願寺を建てた人物）です。この教如の手紙が新潟県には非常にたくさん残っております。教如は兄弟喧嘩をしたので、家康が本願寺を東と西に分けたといわれておりますが、長い隠居生活をさせられている間にも越後へ盛んに手紙を出しております。教如の教団は越後で成り立ったといわれるようなところがあり、その手紙を読みますと個人宛のものは極端に少なく、「講」に出している。日蓮も同じです。教如は今申しましたように非常にたくさん手紙を出していて、これを皆で読めというようなことを書いて、「共同」ということを強く意識しております。そうして頸城では、田圃の開発を通じてみんなが力を合わせてやり遂げようとする「余荷」の習性が生まれていく。その基本的な思想の支えになったのが真宗です。宗教は教祖がつくるものではないのです。

先ほどの酒屋の話で、高田藩に残されている資料によりますと、越後から関東へ造り酒屋が六百軒出ております。その人達は越後の人間を沢山連れて行きます。頸城に吉川という全国で一つしかない醸造科を持った高校があります。この醸造科というのは六百軒の酒屋の杜氏を賄った高校なんです。私どもは、ともすれば、越後に沢山米があるから酒造りが盛んになったように思ってしまうんですけども、そうではないんです。酒を造って生きていくとしたのです。酒を造る専門家を育てるといえるのは、この越後柿崎方面から関東に出ていった酒造家たちが酒造りの専門家を必要としたからなんです。でも、そんなことは誰も言わないで、ただ越後には米があつて酒が出来るという風に考えてしまう。ところが、上州から来て越後を開拓した人たちは、いつでもハングリ―精神、何としてでも力を合わせて自分らの社会を築くということを考える。だから、何処かで助け合う、或いは助け合っていく、のちの余荷というような制度を田圃の共同開発をやった頸城の人たちばかり出しているのです。こういう気性というのは百年や二百年くらいじゃ無くならないでしょ。越後の大地が人を作ったのです。世の中が進歩した、変わったといつても基本で

は余り変っていない筈です。だって、私どもは昭和二十年八月十五日でパッと民主主義になったわけだけでも、それで何が変ったかといえ大して変っていないではありませんか。

そういう意味では、今日この本荘了寛という人物を考える場合でも、余り最初から偉い人として仕立て上げるのもどうか、眉に唾をつけておかなければいけない、という風に私は思うんです。私どもがよく聞く話というのは「伝説」が多いわけですけど、伝説は時代が作って行くというクセがあります。定説のようなことを皆んなが初めから考えていたかという、そんなことはないんです。了寛の場合も同じで、亡くなって何十年も経ちますと、みんなが「了寛は偉い人だった」と言うことになる。世の中には最初から偉い人もおるのかも知れませんが、大抵は実像から離れてどこか作られていく部分というものがあって、つまり嘘の作られ方をする。本当のようでありながら、何かちょっと嘘げなところもあるということとです。

さて、本題の本荘了寛ですが、彼は金井町、昔でいう金澤村千種（本屋敷）の出身です。私の家やなんかで本荘了寛（以下、了寛）はどういう人間かと思ってお婆さんたちが喋っているのを聞くと（私の家は今の国道から少し北に入ったところにある）、「了寛が向こうから道を上って来る姿が見えると、お祖父さんは直ぐ隠れてしもうた。了寛が、コンニチワと言うて家に来て、必ず、今日は絵一枚しかないが一円でどうでしょうか」と絵の押売りをする。道理で私の家には何だか了寛の描いた絵がいっぱいこと（沢山）ある。「了寛は銭が欲しいもんだから、やって来ては、これを買ってくれ、とこういう風に言うた。だから、近所のとっつあん（父さん）方は彼が来ると隠れて、婆さんが今日は留守です、と言うことになっておった」。これは評判が良いとか悪いとかじゃなくて、一般の人には彼はそういう人物に見えたんです。

最近、金井町では近藤福雄さんの写真集（『佐渡写真帖』、郷土出版社）が出て注目されています。私

どもより年輩の人は大抵彼を知っております。この人は変わっているというようなもんじゃなくて（私もこの光景を目にしたことがあります）、バスに乗る時はいつもタダ、車掌さんが切符を切りに来ると、「何だお前、俺を知らねえな」、それから何を言うかというところ、「俺は金沢の近藤ちゅうもんだ。お前は俺を知らんのんか。俺は会社ではいつもタダで乗ることになっておる。宜しく」、で済ます。家から抜け出す時はいつも納屋でお父さんが仕事をしているもんですから、その前を通る訳にはいかない。それで座敷の方から下駄と三脚を持って畦（け）べたを素足で東の街道へ出た。これは有名な話で、彼は住んでいた大和田という部落の笑い者になっていました。



近藤福雄

でも、こういうところは大変面白いですね。戦争が終って農地改革があり、彼は昭和三十年代に亡くなっているんですが、近所の女たちの間では「福雄さんは田圃を一反歩づつ売って遊んだ」ということになっております。近藤福雄さんは私どもに、「おめらち（お前たち）、そうは言うても（農地改革で）タダで取られるより一反歩づつ売って、写真を撮った方がいいじゃないか」。こういう風に講釈を言っておりましたが、佐渡博物館の会議なんかでは例の口調で私たちを絶句させて、アハハと笑う。こういう物の言い方があるのかなあ、という風に思っただけです。

今や近藤さんは再評価され、偉くなって、日本の民間写真家近藤福雄というカリスマ的存在になろうとしております。しかし、実像はお話したとおりです。大和田あたりでは、あんな者が偉え（え）えと言っても腑に落ちんと言う人が多い。彼はまだやさしい方で、これが佐渡へ来た山頭火（俳人）や南方熊楠（民俗学）なんかは案内した者はみんなお金を踏み倒されておりますから、誰も良く言うような人はおりません。最近彼等の全集が出るようになって呆れかえってしまうのです。でも、佐渡の人たちは誰もそれを承知でやっていたんです。

まあ事ほど左様に、人間には頼もしい面もあるわけで、左へ行ったり右へ行ったりしながら生涯にいろんなことをやって、その仕事を後になって私どもが評価する、そういうことになるうかと思えます。



寛了荘本

ところで、了寛はどういう人物であったかについて、生年月日とかはお手元の年表をご覧頂くとして、了寛が、生まれ育った時代にどういう体験をしたか、いかにハングリーであったか、そんなところを注意深く見てみたいと思います。

ハングリーであるということは、本当に貧乏してもハングリーであるし、それだけではなくていろんなことを追い求めて一所懸命に一途になって生涯やることもハングリーであります。つまり食えなくて何かをやるのもハングリー、何かに没頭してそれに入れ上げるというのもハングリーです。了寛はどっちの側を歩いたハングリーかという、彼の青年時代を見ると、誠に「もつねえ（とても気の毒）」の一言に尽きるわけです。

お手元の年表にもありますが、了寛自身は小さい時にお母さんに死別して、お母さんの実家ほんやしき本屋敷の得勝寺（浄土真宗）に引取られ、自分の家では育っていない。大人になって嫁さんを貰いますが、翌年嫁さんと一緒に子供も死んでしまう。それから、自分がいた得勝寺が明治維新の廃仏棄釈で潰されます。二十一歳の時です。食う道が断たれ路頭に迷うわけです。こう、口では簡単に言ってますけど、これは大変な事だと思えますでしょ？ 維新で薩摩出身の奥平謙輔おくひらけんすけがやって来て佐渡のお寺の大部分四〇〇ヶ寺が廃寺になります。それは丁度、私どもが突然、明日から勤めに来ると言い渡されると同じです。まあ年金を貰える年代だったら大したことじゃないと思うかも知れませんが、若い人だったら大変な事で、明日、会社が倒産したりしたら一体どうします？ こういう途方に暮れるような出来事が彼の場合いくつ

本荘了寛関係年譜

- 弘化4年(1847)相川町大字炭屋町光楽寺笠野典藏の長男として出生。  
嘉永4年(1851)母死亡、母の実家本屋敷村得勝寺に引取られる。  
文久元年(1861)本荘家の養嗣子となり了寛と改名、京都で得度、住職の資格を得る。  
慶応2年(1866)従妹の田鶴(17歳)と結婚、翌年田鶴・子死亡。  
明治元年(1868)養祖父の死により得勝寺の住職となるが、維新により廃寺となる。  
明治3年(1870)得勝寺復活。越後の青柳剛斎の塾に入り、五年帰島。  
明治8年(1875)京都に行き島地黙雷むくらいについて西洋宗教学を学び、帰国して『教法微言』を著す。  
明治9年(1876)金沢の小学校に奉職。  
明治13年(1880)『竹窓日記』を著す。  
明治20年(1887)小学校を辞職。11月『北溟雑誌』を発刊。  
明治25年(1892)『北溟雑誌』5周年記念・佐渡物産品評会を金沢小学校で開催。  
明治26年(1893)六月、第六十八号をもって『北溟雑誌』を譲渡。  
明治27年(1894)新訂『佐渡地図』出版。8月日清戦争始まる。  
明治29年(1896)越後・関東を行脚、明治記念堂建設を誓う。3月百十二号をもって『北溟雑誌』廃刊となる。  
明治35年(1902)明治記念堂落成。  
明治37年(1904)能行会をつくる。2月日露戦争始まる。  
明治38年(1905)戦没者150余名の写真を明治記念堂に合祀する。  
大正元年(1912)『佐渡水難実記』刊行。  
大正7年(1918)明治記念堂境内に坂下勇蔵の銅像を建てる。  
大正9年(1920)3月7日死亡。

(『金井を創った百人』金井町、平成12年刊から作成)

も重なって来る。だから、はた目に見ても彼は非常に悪い時に生まれたと思います。維新の時は二十一、二で、その前に京都へ勉強に行ってお坊さんの資格を取って、「ヨシ、これからふんばるぞ」と思っていた矢先に妻子の死、そして廃仏棄釈。こういう不遇をバネにして彼は生涯を歩むわけであります。

この了寛がどういう人物であったかということについて、福浦ふくら（両津市）に夷教会を建てて布教し、了寛と仲良しになったフランス人神父ドルワール・ド・レゼー（以下、ドルワール）が書き残しております。以下、それに拠り、あるいは補足しながらお話を進めたいと思います。

ドルワールは明治十年に新潟からやって来て、明治十三年春まで三年ほど佐渡で布教します。来るに先だって、長年ペアで布教活動してきた大江雄松おとまつという伝道士に両津の宿屋を当らせませす。彼が何故こうしたかと言いますと、夷港（両津市）は外国人居留地になって程ない時で、布教所を建てることにもかなり難航が予想されたので、まずは用心深く旅人を装って泊るということにしたのです。因みに、大江は後に相川中山峠にあるキリシタン塚を作ります。そういうわけで、彼は新潟から渡る時も、夷港ではなくわざわざ寺泊に出るから赤泊港にさがり、歩いて両津まで来ます。ヨーロッパ人だから無理もない話ですが、夷の町は干してあるイカが生臭なまそうて鼻をつまむような所だったというんです。この神父もなかなか日本に対する観察眼が鋭くて、両津に少しばかり住まわして貰えんかと頼んだら、ごみを焼くような臭いのする所を貸してくれたが、毎日臭そうて布教どころではなく命からがら布教生活を送ることになる。それいろいろな人に尋ねてみると、どうやらそこが火葬場の脇だということが分かる。「そういう場所を余所よそから来た人に与えるというのがこの国の悪行」。どうしてこのようなことをするのか、私どもには分かりません。余所から来たと言え、どこか火葬場の隅っこでも与えれば上等の方で、余所者に対する排除の思いというのが島国の佐渡にはありますからね。

或る時、この神父は了寛に出会うことになりましたが、了寛はこの外国人に興味を持ったらしく、以後たびたび神父の所に出掛けるようになります。

了寛は非常に利発な青年だったらしいんです。神父と出会って数日後、今度は了寛がお坊さんの服装をして自分の所へ来たのでドルワールは初めて彼が僧侶だと知ります。それで、神父が今までどうして法服を着てこなかったかを尋ねると、「貴方は耶穌教師だから僧侶である私を嫌うだろうと思つてわざわざ避けていた。しかしお目にかかつてみるとそんなことを考える必要がなくなった、それで今日は僧侶の格好をして訪ねて来た」と、こういう風に言います。ちょっと考えてみると、こういうところに明治の日本の知識人の「構え」というか、そういう感じが出ておりますし、昔から「人形も巻き物から」といいますから、それに相応しい格好をする必要があるようです。それから、日本人というのはキリスト教徒を鬼のように考えるクセがついておりますが、しかし、会ってみると同じ人間だということが分かり、それまでの態度を変えていろいろの話をするようになる。

そうして、了寛はこんなことを言いますが、このことがドルワールの印象に残つて、了寛をどういう風に考えたかが見えてきます。

「…私（了寛）のやうに多少学問のあるものが佐渡のやうな島に引込むのは甚だ詰らぬ事だと思つて、実は昨年京都の本願寺に往き、何かの役員に任じて呉れるやうに願つた。然るに本山は私を受付にした。実に人を見るの明がないのか、將た情実に縛られてゐるのか、兎に角あんな遣り方では仏教は益々衰微の外はないとて、非常に憤慨しながら本願寺を攻撃した。…」（『両津町史』）

了寛には出しゃばつたところがあるんですね。後にこういうところはすっかり影を潜めますが、この時の彼にはそういう人柄がうかがえます。

そうこうしている内にドルワールが本屋敷にある彼のお寺（得勝寺、その後復活）に招かれます。行つてみると随分と立派な大きなお寺で、この時に僧侶（了寛）の本心を明らかに悟つたと、ドルワールはち



得勝寺

よっと大袈裟に非難するんです。

「…彼は極めて丁寧に親しい友の如く歓待し、仔細に案内して見せた。金色粲爛たる立派な種々な仏像の何かを質ねた時、彼は冷笑の声と侮蔑の手真似、羞辱たる面貌を以て、之は阿弥陀如来である、之は何である、吾は其態度に驚いていった。貴下は僧侶でありながら何うして仏像を尊敬なさらぬかと。彼は答えていふ。少し物の解った人の目から何千とある仏が信じられようかと。嗚呼、憐むべきは僧侶なる哉、彼等は仏教を信ぜずして只商売として守って居るのである。…」

(『西津町史』)

これは大変重要なことを突いております。というのは、このことは今日まで伝統があるのですが、日本人は「科学」という言葉の用法を西洋人とは違った風にあてております。例えば日本人が科学と言う場合、宗教は科学によって否定され、対立するものとして受とめておられます。よく分かるんです。歌舞伎、相撲、芝居、止められております。このことは明治政府が定めた法律を見るとよく分かるんです。歌舞伎、相撲、芝居、能もそして謡いも禁じます。理由は、これからは科学の時代だ、日本人はこういうことをやっているから

外国に遅れをとったりして駄目になる、と盛んに鼓吹したので、皆んな「そうだ、そうだ」と思って頭の中に入れた。今でも政府の言うことをちよっとおかしいなと思いつつも、わりかしそういう風に考えるクセが私ども全体にありますよね。日本人は、科学と宗教は全く別の世界のもので、科学は、芸術とか宗教とか文学の類いとは凡そ無縁のもの、対立したものと捉えておられます。ヨーロッパとは全く対照的です。こういう日本人のクセというのは、外国人が日本に来てから特に目立って付くクセなんです。今では、奈良の法隆寺とか日本の古代文化がどうのこうのと言いますが、奈良時代と平安時代のもは良く残っているのに江戸時代のもは殆ど残っていない。明治になってから全部真っさらにしてしまったでしょう。新潟でしたら、大正時代に建てられた県庁の建物、今行けばそれを壊して安っぽい市役所が建っているだけ。新潟県にはお城一つ無い。高田城も新発田城も最近ちょっと造ったものは鉄筋コンクリート造りのにせ建物、福井の永平寺だって鉄筋コンクリート。防災とか理由はあるんでしょう、しかし木造で良いのではないかと思えますが、古いものを直ぐ壊して空き地にするのが本当にまあ好きな民族と言え、それはそうなんですけれども。それが日本人の科学精神なんです。そういえば、日本は外国の文明を受入れる時、受入れる姿勢が一寸違うんです。文明（「文化」じゃないですよ）を受入れるときにいつでも「便利」とか「便宜」とか言います。私の小さい時分にお祭りがなかなかで、それまでの日本の「きんつば焼き」に代る「文化焼き」というのが新しく登場しました。文化鍋だとか文化カマドとか、何かに「文化」という言葉をつつけるのは皆んなその手のもの。要するに、便利だぞということに「文化」を付ける、とても便利な言葉なんです。ポルトガル以来、日常使っている言葉にポルトガル語が非常に沢山残っています。例えばボタン、シャッポ、シャボン、メリヤス、ブランコ、パンなど、皆さんご存知のものばかり。パンなどは、江戸時代から食べていて江戸にはパン屋があるんです、米ばかり食っていたなんてことはないです。パンが無ければパンという言葉が残るわけがない、まんま（米）という言葉しかない筈です。外国人が持ってきた物を使う、そうするとこれまで自分たちが持っていた物をこれは恐ろしいほどおしげ

もなく見捨てて行くわけです。そういう便利性というものを大切に、それが科学で、科学とは便利なものだという風に考えちゃった。文化と科学が対立してしまうのです。

先ほど申しましたように、ドルワールが了寛の所に遊びに行ったら、了寛が、この科学の世の中に仏像なんぞ信用しておられようか、こんなものは食っていくための道具で手段だ、と言いつつ放ったわけです。何も彼ばかりじゃなくて私どももこういう教育を受けて来ております。

まあ早い話が、小学時分に家で漫画なんか読んでると、お前、漫画なんか読んで描いたりしてると中学に入れないぞ、なんて叱られたもんです。親の子供に対する姿勢というものに或る種のクセがあるんですね。私は子供の時分どんな茶碗で御飯を食べていたか覚えてませんが、きっと熊野神社のお祭りなどで売っているひと山いくらの安いのだっように思います。それは親からすると、どうせ子供なんて投げたりして直ぐ壊してしまうから良い物を持たせるともったいない、というような貧乏クセ。ドイツへ行ったら驚いたのは、男の子には先祖伝来のお祖父さんの銀の食器、一番良いものを使わせている。良いものが人を作ると言う。日本の家庭では、子供に良いものを使わせるとか良い絵をみせるとか良い作品に触れさせるとかには余り注意を払いません。こういうクセは戦後のことじゃなくて明治以来の価値観を私どもも持っているわけです。

了寛がドルワールに「仏像なんて商売道具さ」と言い放った時、ドルワールは他の者はともかく僧侶がそういうことを言う筈がないと思っておりますから、了寛が更に「貴方は宗教なんて必要と思ってるのかね」と尋ねた時は、ドルワールは内心では呆れて物が言えなかったという。原文にはそう書いてあるのですが、訳文では悪口にわたる部分は除いて丁寧に訳されております。

さて、もう一度先程の近藤福雄のことに触れますが、彼は写真が好きでしたけれども、それで身を立てるということは当時一般の人には考えられないことでした。身を立てるという事は普通、学校へ入って勉強して一番だか二番だか、まあ良い成績を取って上の学校に入って……ということだと考えた。写真を撮

ったり絵を描いたりして身を立てるといふようなことにはまだ日本ではなつてなかつた。そういう意味では、画家や書家などは異端児だと言います。或る人が夏目漱石について言つております。漱石というのは、俳句を詠んでも子規にはなれず、文章を書いたら藤村に笑われ、そしてイギリスへ英文学を勉強に行く、それでも身を立てられず、という氣持であつたらしく、仲間から何をやっても駄目な男という風に言われていた。ところが、あの猫の話を書いてから世間が評価してくれるようになる。亡くなつてから全集がどんどん出版されて、その手の人は画家や書家、作家などに多いわけです。

何故最初から、生きてゐる間に問題にされたり評価されないか。宮沢賢治だつて生きてゐる間は誰も問題にしないで、注目されたのは亡くなつてからです。別に亡くなつてから偉くなつて悪いと言つてゐるのではありませんけど、私もが生前に正當に注目し得なかつたからですよ。

そういう点では、了寛は彼等と違つて、この頃までは時代の先端を行つてゐるわけです。ドルワールが、「彼等は仏教を信ぜずして只商売としてこれを守つてゐる」と痛烈に批判してゐるように、「確かに了寛は立派な人間ではあるが、宗教に関しては彼と同じ意見の持主ではない」といふ風に言つてゐる。

了寛は明治九年から金沢の小学校の先生をしておりますが、十一年頃から佐渡では自由民権運動が盛んになります。今日はこれをお話する時間はありませんが、この運動の「自由」は戦後の「自由」と似かよつておりまして、不平不満を言うといつた方が近い感じの自由。日本人の自由に対する考え方というのは、こういう傾向が強い。「自由とは責任を伴うものだ」とか、そんな事を申し上げるのではありません。日本人の物の考え方というのは歴史的に見てもわかりかし自由なんです。例えば、女性には権利がなかつた、なんて言いますけど、江戸時代にはちゃんと親権もあるし、後家さんになつたら旧姓に戻れるんです。これがヨーロッパの女性になると実に情けないくらい具合が悪い。日本の女性はこれに比べればるかに権利が認められ地位も高い。我々の家だつて、カミさんはおとなしい顔をしてゐるけども財布の方はしっか

り握っております。ヨーロッパの女性はいまだに財布を預かるということがない、預けてはいけないということがはっきりしております。私もそうしたいと内心思っているのですけれど、この席ではこう言いますが、家に帰れば不利に働きますので、まあ別の所で金を工面するということになる訳です。(笑い)

ここで、どうしてこの不平不満に近い自由というものが出てくるのか少し考えてみたいと思います。

江戸時代ではご存知のように生産の単位が家であり、家が非常に重みを持つてあります。今は家と言ったって下宿屋のようなもので、家族員のそれぞれがいろいろな仕事に携わっているし、親が子供の給料を訊いたりはしません。お互いに財布はあてにするな、ということになっております。ところが、江戸の頃は田圃を家族で一緒に作っているわけですから、家というものは一つで家族制度が生まれます。それが明治以後、皆んな余所へ勤めに出るようになって、段々崩れていきます。江戸時代のように川の水を村全体で使用した時代では、一軒一軒が勝手なことを言っている暮らしていませんから、調整するため村で決め事を作って各家の間の利害を調整し、家の中では親父が居て家の中のバランスを考える。そうして、村や家に秩序というものが出来たんです。明治以後この制度が解体して、今度は村という枠組から「個人」が出て行きます。こういう時に村と個人との境に見合う秩序が作られなければならないのに、なかなかそれがうまく出来なかった。ヨーロッパの方がやり易い。日本人は、不平不満を大いに鳴らしますが、調整が出来ない。これは戦後に抱え込んだ「家」の解体期に新しい社会に対して出来るべき、きちんとした個人社会の秩序が、私どもの世代では作り得ないからです。誰でもそれを作る必要性を感じているのですが、それだけでは秩序は生まれません。つまり、個人の社会にどんな秩序が相応しいのか考えなきゃいけないのに、それを考えるのが日本人はとっても下手なんです。江戸時代から日本は憲法のない国です。ヨーロッパではどんな国でも、貧富の如何に拘らず、自分の国家や個人社会が目指す明確な理念を持っております。日本では、あれはするな、これは駄目だという法律しかないんです。生産単位じゃない武士が社

会を牛耳っていたからで、これを百姓や町人が牛耳っていたらちゃんと秩序を作った筈です。新しい生産社会を牛耳っていない者たちが法律を作ったから禁止法令ばかりなんです。これは今の学校の規則を見ても同じです。大抵、「この学校は〇〇を目指す」なんて書いてありますが、それは短くて、後はあれをするな、これをするな、スカートの丈はどうのこうのというような事ばかり書いてある。これも秩序には違いないが、「目指す」という所がいかに弱い。個人社会を作ることの議論が少ないからうまくいかない。

さて、明治十六年、この自由民権運動で佐渡の有田眞平（有田八郎の義父）が天皇不敬罪第一号となつて新潟の牢で獄死しますが、その頃了寛はもう一度流浪します。そうして、「我々の自由民権運動は口だけなんだ、口だけでなく貴方が何をしようと、俺はこれをやるうとしてゐる」という風に考えるところが了寛の考え方のクセ、明治二十年に彼は学校を辞めます。そして、自分は「不言実行」「せんどの踐度能行」、人間にとって必要なのは口で言うことではなくて自分が何か一つを成すことだ、という考えになつて、生涯このことを実行するようになります。

その頃、この了寛に大きい影響を与えた茅原鐵蔵（金井町）という人物がおります。金井町新保しんほに大き



茅原鐵蔵

**廣 告**

一 コンテンズミルク 罐詰  
但一斤大代金廿八圓

一 バター  
但一斤大代金廿五圓

一 牛肉佃煮  
但一斤大代金十八圓

全 上

全 上

佐渡牧畜會社

此の更なる爲に本社銀行の貸付及び衛生に必用なる  
 程草葉類  
 程草葉類

佐渡牧畜会社の広告  
（『北溟雜誌』第九号）

な野球グラウンドがある所に、これからは日本も変わると言つて牧畜会社を作るものの、結局は潰れてしま

います。茅原は東京大学の農学部の前身で勉強した人物で、了寛の知恵袋、この人が大の実践家でした。彼について有名な逸話があります。彼が米の品種改良をしようと新しい品種の種籾を何俵か取り寄せて百姓にタダで配ったが、その新しい品種の稲は少しも広まらなかったという。百姓は二升か三升づつ持ち帰ったものの、みんな食べてしまったからなんです。今申し上げたように茅原は、乳牛をとり入れ牧畜会社を作りバターやミルクの製造を始めるんですが、滋養のあるものは病気の時に、というような習慣が手伝って人々に理解されず、売れずに潰れてしまいます。また彼は北海道に行つてアメリカの牧草の二世を貰つて佐渡に持つてきて植えるというような農業分野を主体とし、その他にも多彩な実践活動をするのです。そういう彼の実践活動の影響を受け、了寛はこの茅原を社長にして雑誌を発行することになるわけです。

これが『北溟雑誌』といつて、明治二十年に新潟県では一番早く発行された雑誌です。二十六頁、定価四銭で出したこの雑誌は、「政治上ノ所見ヲ除ク外、凡テ百般ノ學術技芸ニ関スル時事及ビ諸大家ノ論說ヲ蒐集シ専ラ本州（佐渡）ノ民智ヲ開發シ事業ヲ振興セシムル」ことを目的とする月刊雑誌であります。「政治上の所見」を除いたのは、当時国会開設を前に、自由民権運動が盛んで政府が新聞発行や集會に厳しい制限を加えており、彼が何かと政争に巻き込まれるのを嫌つたからだと思われまゝ。

今どき、雑誌などは簡単に発行したり読んだり出来ませんが、この当時に雑誌を作るといふことはやっぱり大変な行動力で、第一、こんなものを作つたつて売れるわけがないんですから。ですけれども、お読みになると分かりますが、一番必要なのは物を考えることで、そのために雑誌というものを作り、いろんなことで論を戦わすということが基本になればいけないと、彼は考えるのであります。

論ずるといふことで、ちょっと思い出したことがあります。実は現在、新潟県で雑誌一つ持たないのは佐渡だけなんです。新潟県では一番最初に雑誌を作りながら今は何もありません。新聞もないでしょ。要するに曾ての高田藩や新発田藩や佐渡一國という水準で考えると新聞一つ、雑誌一つ持たないのは佐渡だけなんです。まあせめて、そう言やあそうだなというぐらいに思つて下さい。新潟県も大体似たようなものな

明治二十年十一月二十三日発行

毎月廿五日發兌

# 北溟雜誌

第一卷 第一號

佐渡中興村  
百廿八番地

北溟社



『北溟雜誌』創刊号表紙  
(復刻・第一卷、山本修之助編)

んです。論を戦わすことができなくなりましたよ。

新潟県は明治十九年に人口百九十万人の全国一の大県ですが、明治四十五年まで大学一つ持たない唯一の県、美術館なし、博物館なし、出来たのは戦後でしょ。だから悪いというのではなくて、どうしてそうなったかを考えてみるのが大切じゃないかと思うんです。「そんなら雑誌でも作ろうか」という話は別にして、雑誌一つ、新聞一つ作れないのは、一国にしては人口が少ないからなんてことじゃ済まない問題です。そして毎々に「佐渡は観光がだちかん（駄目だ）」と、誰でもその程度のことを口にして佐渡のことを憂慮しているつもりになって、これまで過ごして来ているんです。論が出てこないんです。

了寛は儲かると思っているわけじゃなくて、やる気でやっているだけなんです。雑誌は八年半近く続きますが、明治二十六年には他人に譲り渡すことになりました。

そして、その代わりといっているのはなんです。明治三十五年に建設された「明治記念堂」は了寛の生涯の仕事の中でも最も輝かしい仕事であります。彼は日清戦争に出征して異国に骨を埋めた四十余名の佐渡人



明治記念堂（右）と開導館（左）

の功績を顕彰するための施設を作ろうと考えます。彼の書物を読みますと、日清戦争や日露戦争で亡くなった人たちに感謝するのが自分たちが持つべき心情である、と述べております。それで彼は戦死者の家一軒一軒を訪ね、その遺留品を預かってきます。義捐金千円を集め、お堂を建て、大山巖元帥に「忠魂」の額をお願いし、右に日清戦争の、左に日露戦争の戦没者合わせて百五十余名の遺影を掲げ、遺留品を飾ってその霊と遺族を慰めるのです。内部の扁額は勝海舟や東郷平八郎の揮毫など、その辺りのものを集め掲げております。お堂に向かって右側の「明治記念堂」由来記と戦没者名を記した銅柱と礎石は、当時新穂村生椿はよつばきで加持祈禱をしていた行者松木西願まつきさいがん（福井県出身）とその信徒が寄進し、銅柱正面には「無量寿むりょうじゆ経きやう」という浄土教の経典にある、「臣下自在にして機偽きぎ多端たたんなり、度を踐ふみ、能く行よひて、其の形勢を知る」からとつた言葉「踐度能行」があり、この文字の制作は鍔金家の初代宮田藍堂が鍔金ざんかねなしで鑄造し、ここに収めてくれたものです。そして明治三十八年、博物館「開導館かいどうかん」をこれに併設します。開導館については、明治記念堂の美術館ということで、佐渡の人々を中心に鍔金などいろいろなものも寄付してくれています（末尾参照）。それ



「踐度能行」の銅柱と坂下勇蔵の銅像

から大正七年、了寛は日露戦争で戦死した「一兵卒坂下勇蔵」（伍長、相川町二見出身<sup>かたみ</sup>）の銅像を銅柱の上に建てます。伍長より偉い階級の軍人は大勢いるわけですから、了寛はそういう社会的な地位とか階級に関係なしに名も無い一兵卒の銅像を建てたわけでもあります。その他、このお堂の西側の松の根方に日本海海戦（日露戦争）で戦死して佐渡に流れ着いたロシア水兵の墓を作りました。当時の日本人はロシア人を鬼のように嫌ったわけですから、彼は海府<sup>かいふ</sup>（西津市の北部）から拾ってきたロシア水兵二名の死体をここに埋葬し霊を弔います。彼が、故国は違っても皆同じ人間だ、と言ったので当時の佐渡の人たちはびっくりしたらしいです。こういうことを実際にやるには若干の、やっぱり思想がなくては出来ないことだと私は思います。今、私どもはこんなことは当り前の事だという顔をしておりますが、立派な決断だったぐらいのことは言えるわけでありませう。それにしても、先程お話しました近藤福雄とか、この了寛

の目線には、共通した「平民」の考え、とでもいったような佐渡特有のものが感じられて大変面白いことだと思えます。

ところで、了寛は非常に貧乏なんですね。大正二年に『佐渡水難実記』という、明治三十年八月佐渡を襲った大水害の模様を描いた本を発行するんですが、「とても借金で苦しんでいるので、とにかく借金を返したいから皆さんこの本を買ってくれ」と頼みます（末尾参照）。この貧乏な了寛の所へ金を借りに行った男がおります。了寛はすっかり困ってしまい、中興（金井町）の世尊院せそんいんというお寺に連れて行って本堂の大襖に絵を描かせます。描いた男が土田麦僊つくだばくせん（新穂村、日本画家）で、金をもらい東京とうきょうに行くわけがあります。このお寺は借しくも昭和五十九年に焼失、麦僊の絵も灰になってしまいました。因みに、了寛が亡くなった時にはまだ確か数千円の借金が残っていた筈です。

それから五十年も百年も経った今日から見ますと、本荘了寛が島民の協力を得てこのような事をやってのけたというのは、やっぱり凄いことだなあと思うわけがあります。これからだってそういうことはいくらでも続くんであります。皆さんも機会を作って是非この明治記念堂や開導館などをご覧になって下さい。

今日は、本荘了寛がどんな時代を生きて、どんなことを成し遂げたかということについて、その周辺のことを含め簡単にお話申し上げました。それにつけても、私どもも生涯のうちに虎のように皮じゃなくても、何か一つぐらいは後の世に残したいと思うわけがあります。

(了)

(注1) 本文の人物写真は、いずれも『金井を創った百人』（金井町）によっております。

(注2) ロシア水兵の墓は、新たにお堂（の東側）と了寛記念碑との間に平成十四年五月、「在新潟ロシヤ連邦領事館」によって建立されましたが、これまでの標柱と説明板はそのまま残されております。

(参考)

○開導館に関する新聞記事(「佐渡新聞」)

・明治記念堂の美術園

本荘了寛の創立せる金沢村大字千種の明治記念堂は門衛所より附屬開導館の造作も最早出来上り物品の陳列も一層見ばえ能くなれり、堂主本荘了寛は更に本州美術園の一室を企画し故人の手の跡は勿論総て後世の参考に伝ふべき物品を集むる事とせしが、此頃相川三浦常山は茶葉釉浮牡丹の花瓶・紫雲釉の水注・玉虫釉の銚子及肖窯より茶器等十六品を寄贈せしが孰れも逸品なりとぞ、又伊藤赤水も亦自製の陶器を出品せんと目下準備中なり、(中略)又本州の画伯と称せらるゝ小倉村の酒井朱津は畢生の揮毫として大幅を製し寄贈せんとて此頃堂主に其下図を示されたりとの事なり(以下略)

(明治三十二年六月二十一日)

・明治記念堂寄贈品

最近記念堂へ寄贈品左の如し

△露国の軍服外十一點、歩兵第十六連隊重傷兵附号白票、水渡田出征軍人渡辺快二△露兵のハンカチーフ、平泉同渡辺兼吉△野砲々丸、東京同坂田龍太郎△台湾の藤の実、平清水同北見精蔵△ケルレル中将愛馬の鉄蹄、上山田同牧野平作△露兵の星章、上山田同中川助太郎△初代羽甚の薄茶碗、相川伊藤松蔵△芝の庵式香爐、五十里本間琢齋△西行の置物、同人△班紫銅香爐、五十里真藤真山△韓國国政争志、幣原文部視学官

(明治四十二年七月十一日)

・印度器物寄贈 目下郡内各町村を巡回布教中の真言宗伝導師佐藤光峯師は去る二十七日金沢明治記念堂主本荘了寛師を訪ひ印度セーロン島より齎らしたる真鍮製の大き鉄瓶位るありて印度にてセンボーと称する者を記念堂へ寄贈したが該品は印度南方仏教徒が常に携帯して水を飲み又は顔を洗ふ時などに使用する器物なりといふ

(明治四十三年七月二十九日)

・明治記念堂へ寄附 金沢村明治記念堂へ長岡第十三師団長より数冊の日露戦役記念帖及び軍事上参考とすべき書籍四十五冊を、此程来郡せし山口參謀より台湾の生蕃酋長の甲冑を、楯石本県警察部長より露国土人の鍋を寄贈されたり

(明治四十四年八月二十二日)

明治紀念堂へ寄附 大隈總理大臣は絹地御大典の図及び自己写真を、又元佐渡鉾山長たりし神田工學士は英領緬甸より齎せる珍奇なる印度不仏一体を、新發田連隊の国府歩兵少佐は砲彈數個等を、河崎村大字大川海軍三等兵曹山口賢一氏は青島攻囲軍紀念の砲彈破片を何れも金沢明治紀念堂へ寄附したり、山口兵曹寄贈の彈丸は大正三年十一月三日青島ビスマーク南砲台二十八〇巨砲より我海軍陸戰重砲隊に発射せられ砲員七名を斃し六名を傷けたるものにして此破片の他の一片は東京九段遊就館並びに築地海軍参考館にありて得難き紀念品なりと

(大正五年三月二十九日)

○本莊了寛、『佐渡水難実記』(末尾)で購入を訴える

稟告

兼テ報告ニ申述べ候通り、汪生不本意ナガラ家政悲運ノ応急策トシテ一昨年十二月四日官民諸君ノ御同情ヲ仰ギ書画抽籤会ナル者ヲ催シ候処、幸ニ来会者千八百七十人ヲ得此収入千八百五十円アリ、其費用五百円ヲ引去リ即チ負債五千円ノ内千三百余円ヲ償却仕り候、然レドモ尚多額ノ負債ヲ余シ居候、因テ此際何トカシテ債主ニ德義ヲ失セズ諸君ノ高義ヲモ空クセズ随テヤ、老後ノ困難ヲ緩メ年来ノ紀念堂事業ニモ最後ノ奮発ヲナシテ功一簣ヲ欠クノ遺憾ナカラシメ度ニヨリ抽籤会二次グノ一策トシテ本書出版ノ義ニ及ビ候、是ハ一二萩野博士ノ高慮ヲ煩ハシ候、且ツ出版費等ニ付テハ越後ノ内藤久寛及ビ本州ノ齋藤恒・青木永太郎・野沢卯一・森知幾・嵐城嘉平・又河口・土屋・小菅・渡辺ノ諸君ノ厚配ヲ蒙リタリ、此ニ余白ヲ藉リテ其厚誼ヲ鳴謝スルト共ニ所在諸君ニ一層ノ御同情ヲ賜ハリ慈善的御購読被成下度再応願上候也

著者拜